

本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告 — 1993 年度の集計 —

佐藤方信, 藤井佳人, 菊地博生

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

(主任: 佐藤方信教授)

(受付: 1995年2月14日)

(受理: 1995年3月17日)

Abstract : Pathological examinations undertaken in 1993 at the Department of Oral Pathology, Iwate Medical University, were statistically reviewed. Total number of biopsy materials examined amounted to 644 (including 65 from outside sources) and from 512 cases (230 males ; 282 females). By histological classifications, 3 biopsies were odontogenic tumors. Of nonodontogenic benign tumors, 27 were diagnosed as fibromas, 7 as papillomas, 7 as hemangiomas, 4 as lipomas and 3 were pleomorphic adenomas. The malignant tumors consisted of 41 squamous cell carcinomas (tongue 17, gingiva 11, buccal mucosa 5, hard palate 2, oropharynx 2), 3 malignant melanomas, 2 adenoid cystic carcinomas and 22 carcinoma in situ. Upon examination of the histological types of odontogenic cysts, 37 were radicular cysts, 14 were dentigerous cysts and 13 were primordial cysts. Of nonodontogenic cysts, 34 were diagnosed as salivary gland cysts, 31 as postoperative maxillary cysts and 4 as epidermoid cysts. Also found were 22 cases of hyperkeratosis, 18 chronic localized hyperplastic gingivitis, 27 with Sjögren's syndrome, and 70 having chronic inflammatory (granulation) tissue.

Key words: biopsy materials, statistical report, oral lesion

緒 言

口腔病理学教室において, 病理組織検査は重要な業務の一つであり, 我々の教室では本学歯学部付属病院の病理組織検査を担当している。今回, 1993 年度 (平成 5 年) に取り扱った病理組織検査について種々の観点から集計したので, 若干の考察を加えてその結果を報告する。

検索症例と方法

1993 年度に取り扱った組織検査の集計は, 本学中央臨床検査病理部門に保管されている病理

組織検査台帳をもとに行った。なお, 症例数と病変数の集計にあたっては, 同一症例から二度以上にわたり組織検査が行われていることがあるので, 重複して集計されないように慎重に行った。臨床的事項は組織検査依頼書の記載を参照した。

また, 1993 年度から本学以外の病院歯科および開業医から依頼された材料についても, 我々の教室で取り扱うことになり, 5 月からこれらの材料についても診断しているので, この報告ではこれらの検査についても合わせて集計した。

Statistical survey of pathological examinations undertaken in 1993 at the Department of Oral Pathology, Iwate Medical University.

Masanobu SATOH, Yoshihito FUJII and Hiroo KIKUCHI

(Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka, 020 Japan)

Table 1 Monthly number of biopsy -1993-

Sex	Month												Total
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
Male	25 (0)	27 (0)	20 (0)	33 (0)	22 (4)	25 (4)	18 (4)	21 (3)	20 (3)	18 (3)	23 (9)	28 (0)	280 (30)
Female	24 (0)	24 (0)	17 (0)	31 (0)	25 (2)	24 (3)	15 (4)	22 (5)	34 (4)	24 (9)	36 (4)	23 (4)	299 (35)
Total	49 (0)	51 (0)	37 (0)	64 (0)	47 (6)	49 (7)	33 (8)	43 (8)	54 (7)	42 (12)	59 (13)	51 (14)	579 (65)
	49	51	37	64	53	56	41	51	61	54	72	65	644

(): No. of the requests from the outside Hospitals

結 果

1. 病理組織検査件数と症例数

1993年度(平成5年)における病理組織検査件数(Table 1)は644件(男310件,女334件)であり,このうち学外からの依頼は65件であった。学内の症例についての依頼先(診療科)は全ての症例が口腔外科であり,他科からの依頼はなかった。検査件数を月別に見ると,11月が72件で最も多く,12月,4月,9月が60件以上であり,3月と7月は少なかった。

この年度の迅速診断の検査件数は33件(男24件,女9件)であったが,学外からの検査依頼はなかった。

また,この年度の検査症例数は512例(男230例,女282例)であり(Table 2),このうち学外からの症例は63例(男30例,女33例)で

Table 2 Age distribution of cases -1993-

Age group	Male	Female	Total
0-9	9 (2)	7 (3)	21
10-19	14 (5)	12 (5)	36
20-29	17 (5)	27 (1)	50
30-39	20 (2)	19 (5)	45
40-49	34 (5)	47 (7)	93
50-59	31 (1)	52 (2)	86
60-69	45 (1)	55 (6)	107
70-79	25 (6)	23 (2)	56
80-89	5 (1)	6 (0)	12
90-99	0 (0)	1 (0)	1
unknown	0 (2)	0 (2)	4
Total	200 (30)	249 (33)	512

(): No. of requests from outside Hospitals

あった。これらの症例を年代別にみると,60歳代が107例で最も多く,40歳代の93例,50歳代の86例,70歳代の56例,20歳代の50例と続いていた。なお,年齢の不明の症例が4例あったが,全て学外から依頼された症例であった。

2. 組織診断別症例数

組織診断(病変)別に症例数(平均年齢)をみると(Table 3),歯原性腫瘍ではエナメル上皮腫が3例(全て女性,48.0±21.1歳)であった。非歯原性の良性腫瘍ないし腫瘍状病変では乳頭腫7例(50.6±19.7歳),線維腫(線維性ポリープ,刺激性繊維腫など)が27例(49.5±16.3歳),血管腫7例(57.7±19.2歳),脂肪腫4例(39.5±26.4歳),過角化症(白板症)22例(57.2±13.1歳),上皮性異形成3例(49.0±24.8歳),線維性異形成3例(29.7±16.2歳),唾液腺の多形性腺腫3例(44.3±6.1歳)などであった。

悪性病変では扁平上皮癌が41例(67.1±10.4歳),悪性黒色腫3例(62.3±7.4歳),疣贅癌1例(38歳),その他の悪性腫瘍1例(32歳),未分化癌1例(60歳),上皮内癌2例(65.0±5.0歳),腺様嚢胞癌2例(59.5±17.5歳),横紋筋肉腫1例(8歳)などであった。性別では非歯原性良性病変は女性に多く,悪性病変はほとんど性差がなかった。

嚢胞性病変についてみると(Table 4),歯原性嚢胞(平均年齢)では歯根嚢胞が37例(40.1±16.2歳)と最も多く,原始性嚢胞が13例(31.9±9.5歳),含歯性嚢胞が14例(24.2±

Table 3 Number of tumor and tumor like lesions - 1993 -

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic	0	3	3
Ameloblastoma	0	2 (1)	3
Non-odontogenic, benign	30	55	85
Papilloma	0	5 (2)	7
Hyperkeratosis (Leukoplakia)	13 (2)	7	22
Epithelial dysplasia	1	2	3
Fibroma (Fibrous polyp, Irritation fibroma, Fibrous hyperplasia)	5	18 (4)	27
Verruciform xanthoma	0	1	1
Hemangioma	0 (2)	4 (1)	7
Lymphangioma	0	1	1
Lipoma	2	1 (1)	4
Traumatic neuroma	1	0	1
Neurinoma	0 (1)	0	1
Exostosis	1	0	1
Cemento-ossifying fibroma	0	0 (1)	1
Fibrous dysplasia (of jaws)	1	2	3
Periapical cemental dysplasia	0	2	2
Pleomorphic adenoma	1	2	3
Basal cell adenoma	0	0 (1)	1
Non-odontogenic, malignant	27	25	52
Squamous cell carcinoma	20 (1)	20	41
Verrucous carcinoma	1	0	1
Undifferentiated carcinoma	0	1	1
Carcinoma in situ	0	2	2
Malignant melanoma	1	2	3
Adenoid cystic carcinoma	2	0	2
Rabdomyosarcoma	1	0	1
Malignant tumor	1	0	1

14.2歳)であり、これらを性別に見るといずれも男性の症例が多かった。非歯原性嚢胞では唾液腺嚢胞が34例(20.7 ± 14.3歳)で最も多く、次いで術後性上顎嚢胞が31例(49.9 ± 11.5歳)であり、切歯管嚢胞は1例(64歳)、類表皮嚢胞

Table 4 Number of cyst and cyst like lesions - 1993 -

Lesion	Male	Female	Total
Odontogenic	29 (11)	19 (5)	64
Radicular cyst	16 (7)	12 (2)	37
Primordial cyst	8	3 (2)	13
Dentigerous cyst	5 (4)	4 (1)	14
Non-odontogenic	29 (7)	29 (6)	71
Incisive canal cyst	0	1	1
Postop, maxillary cyst	12 (3)	14 (2)	31
Salivary gland cyst	14 (3)	13 (4)	34
Epidermoid cyst	3 (1)	0	4
Simple bone cyst	0	1	1
Cyst*	3 (1)	4	8
Total	80	63	143

*Precise type not histologically determinable

は4例(39.0 ± 18.1歳)と少なかった。非歯原性嚢胞の症例には明瞭な性差はみられなかった。また、明確な組織診断が出来なかった嚢胞ないし嚢胞性病変が8例みられた。

炎症性およびその他の病変では(Table 5)、慢性限局性過形成性歯肉炎(エプーリス)が18例(年齢不明1例, 57.7 ± 20.1歳)、シェーグレン症候群27例(51.1 ± 15.4歳)、扁平苔癬6例(年齢不明1例, 60.6 ± 7.2歳)、慢性上顎洞炎

Table 5 Number of inflammatory and the other lesions - 1993 -

Lesion	Male	Female	Total
Radicular granuloma	1	1	2
Chronic inflammatory (granulation) tissue	30 (3)	33 (4)	70
Chronic and localized hyperplastic gingivitis (Epulis)	4 (2)	8 (4)	18
Candidiasis	0	1	1
Actinomycosis	1	0	1
Chronic sialadenitis	1	1	2
Chronic sinusitis	4	1	5
Sialolithiasis	3	2	5
Osteomyelitis	2	0	2
Pemphigoid	0	1	1
Lichen planus	1	4 (1)	6
Sjögren syndrome	3	24	27
Other	2	1 (1)	4
No diagnosis	13	44	57
Total	65 (5)	121 (10)	201

Table 6 Distribution sites of squamous cell carcinoma -1993-

Sites	Male	Female	Total
Gingiva			
maxillar	0	1	1
mandibular	5 (1)	4	10
Buccal mucosa			
left	1	1	2
right	1	2	3
Tongue			
left	3	4	7
right	2	4	6
root	1	0	1
inferior	1	0	1
unknown	1	1	2
Palate hard	1	1	2
Floor of mouth	2	0	2
Maxillary sinus			
left	0	1	1
right	0	0	0
Lip lower	0	1	1
Oropharynx	2	0	2
Total	20 (1)	20	41

5例 (55.4 ± 6.7 歳), 唾石症 5例 (42.6 ± 23.3 歳), 骨髓炎 2例 (56.4 ± 8.7 歳), カンジダ症 1例であり, その他に慢性炎症性 (肉芽, 潰瘍) 組織などと診断した症例が 70 例と多かった。また, 特別な診断を付さなかった症例が 57 例

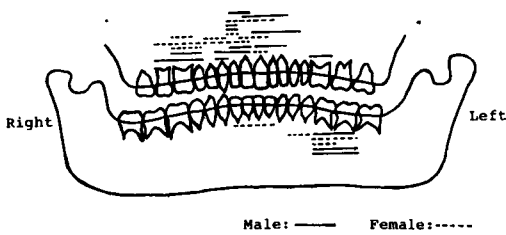


Fig.1 Distribution sites of radicular cysts.

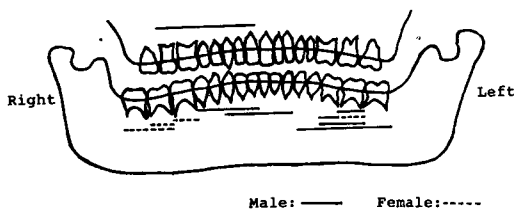


Fig.2 Distribution sites of primordial cysts.

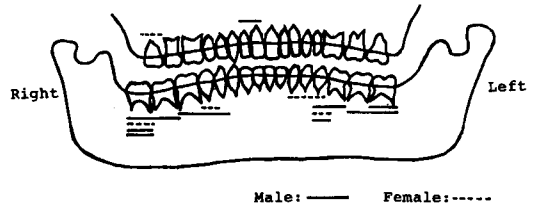


Fig.3 Distribution sites of dentigerous cysts.

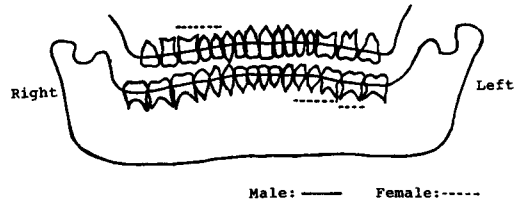


Fig.4 Distribution sites of ameloblastomas.

であった。

3. 発生部位別症例数

歯根嚢胞 (Fig.1) は上顎の前歯部から右臼歯部に多く, 下顎では左臼歯部に多かった。原始性嚢胞 (Fig.2) と含歯性嚢胞 (Fig.3) は上顎に少なく, 下顎に多かったが, 特に含歯性嚢胞は下顎の臼歯部に多く発生していた。

エナメル上皮腫 (Fig.4) は症例が少なかったが, 左下顎臼歯部と右上顎臼歯部に発生していた。

扁平上皮癌 (Table 6) では舌癌が 17 例 (平均年齢 63.6 ± 11.7 歳; 男 59.3 ± 8.9, 女 68.5 ± 12.9 歳), 歯肉癌が 11 例 (73.2 ± 4.6 歳), 頬粘膜癌が 5 例 (68.4 ± 6.1 歳), 硬口蓋癌が 2 例 (80.0 ± 12.7 歳), 口咽頭癌 2 例 (61.5 ± 9.2 歳) などであった。

考 察

病理組織検査は本学部口腔病理学教室において重要な業務である。我々の教室で過去に取り扱った病理組織検査件数は 1991 年度が 474 件¹⁾, 1992 年度は 513 件であったが²⁾, 今回集計した 1993 年度は著しく増加し, 644 件となっていた。これはこれまで学外の病院歯科や開業医から依頼された組織検査は中検病理にて取り扱ってきたが, 1993 年度からは著者らの教室に

で診断することになったからである。しかし、学外から依頼されたこれらの65件を差し引いても本年度は579件となり、昨年度に比較して増加の傾向は顕著であった。

月別の検査件数では1993年度は4, 11, 12月が比較的多かったが、1991年度は2, 7, 8, 9, 10月が多く¹⁾、1992年度は5, 6, 7月が比較的多かった²⁾。これらの成績から見ると、病理組織検査件数は毎月に変動がみられるが、逐年的には特別な傾向は見られなかった。また、1993年度に病理組織検査を受けた症例の年齢は40, 50および60歳代が多かったが、この3年間^{1,2)}の比較では特段の傾向は見られなかった。

全癌にせめる口腔扁平上皮癌は2~4%であり⁴⁾、口腔粘膜に由来する悪性腫瘍はほとんどが扁平上皮癌である³⁾。今回の集計では扁平上皮癌の発生部位では舌が最も多く、次いで歯肉であり、その上、舌では舌側、歯肉では下顎が圧倒的に発生頻度が高かった。本邦での扁平上皮癌の発生頻度は歯肉、舌、口底、頬粘膜、硬口蓋、口唇の順に多く、舌癌は多くが側縁に生じ、歯肉癌は下顎の方が多いと報告されている³⁾。このような傾向は著者らの教室で扱ったこれまでの組織検査においても見られている^{1,2)}。これまでの集計によると、1991年¹⁾、1992年²⁾ともに腫瘍では扁平上皮癌がもっとも多くなっていた。1993年度も扁平上皮癌が最も多かったが、この3年間で見ると1991年が27例¹⁾、1992年が36例²⁾で、1993年度は41例と逐年的に増加の傾向が見られた。なかでも1991年度と1992年度は圧倒的に男性症例が多かったが^{1,2)}、1993年度は男性が21例、女性が20例であり、女性症例の増加が著しく、ほぼ同数になっていたことは注目される。近年、わが国において女性の肺癌症例が増加している折から口腔領域の癌においても女性症例が増加していたことは大変興味深いことであった。一方、米国においても口腔癌にせめる女性の割合が高くなってきている⁴⁾。このような傾向は今後も注目してゆかなければならない点であろう。

扁平上皮癌症例の来院時の年齢では1991年度は 65.0 ± 11.5 歳¹⁾、1992年度は 60.8 ± 12.3 歳²⁾であったが、1993年度は 67.1 ± 10.4 歳と高齢化していたことも興味深い事実であった。今後も症例を増して検討して行かなければならない事である。

嚢胞および嚢胞性病変の分類では、過去の成績^{1,2)}との間に大きな相違は見られなかった。また、今年度も組織学的に確定診断のつかなかった嚢胞あるいは嚢胞性病変が8例あったが、これまでもこの程度の割合で確定診断できなかった症例が見られた。これは組織検査材料が小さかったり、適切な部位から材料が採取されていなかったり、強い炎症性病変のため組織像が改変されていたことによる。

結 語

著者らは1993年度に口腔病理学教室で取り扱った病理組織検査を種々の観点から集計し、若干の考察を加えてその結果を報告した。

本稿の要旨は岩手医科大学歯学会第39回例会(1995年2月25日、盛岡市)で報告した。

文 献

- 1) 佐藤方信, 佐藤泰生, 藤井佳人: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告 - 1991年度の集計 -, 岩医大歯誌, 18: 2, 136-142, 1993.
- 2) 佐藤方信, 藤井佳人, 佐藤泰生: 本学歯学部口腔病理学教室における病理組織検査の報告 - 1992年度の集計 -, 岩医大歯誌, 18: 3, 210-215, 1993.
- 3) 高木 実: 石川栄世, 牛島 宥, 遠城寺宗知編: 外科病理学, 第2版, 文光堂, 東京, 97-132ページ, 1990.
- 4) Regezi, J. A. and Sciubba, J. S.: Oral Pathology, Clinical - Pathologic Correlations, 2nd ed., W. B. Saunders Comp. Philadelphia, pp 77-78, 1993.